

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年5月第3号

なぜ「聞名ループ」を提起したか

ご讃題

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、無量・無数の仏国土における衆生達が、わたくしの名を聞いて、かしの仏国土に生まれるために心をかけもろもろの善根をさし向けるとして、彼等が一無間[罪]を犯した者達と正法誹謗するという障礙に覆われた衆生達とを除いて一たとえ十たび心を起こすことによってでも、かしの仏国土に生まれぬようであるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません(同第十九願、藤田 宏達訳)

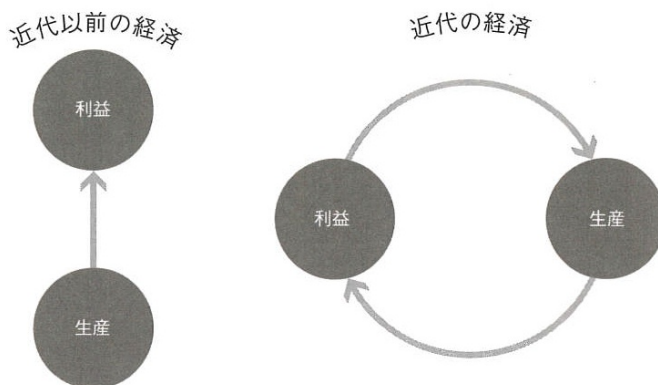
はじめに

十八世紀後半、経済学者アダム・スミスが『国富論』（大河内一男監訳中央公論新社）に著したとされる近代以前の経済と近代の経済モデルが、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』（下）（柴田裕之訳河出書房新社）に単純モデル表示されている。

それが次のイラストである。

近代より前の経済では、利益の再投資という規模の拡大概念がなく生産から利益への一方通行で終わってしまう。

これに対して近代の経済では、利益の再投資で経済規模が拡大する。



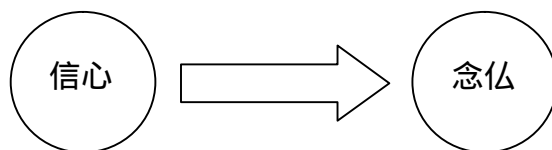
利益が経済社会に再投資される信用(信頼)がエンジンとなる仕組みである。

聞名ループの構造

不肖は、前記イラストを初めて目にしたとき人間が関わる世界というのは分野が変わっても驚く程酷似するところがあるものだと思わないではおれなかった。

なぜなら、それこそは、不肖が日頃から抱いてきた「信心正因 称名報恩(略して、信因称報)モデル」と聞名 澄浄(信楽) 十念(讃仰) 聞名から成る「聞名ループモデル」と酷似していたからであった。

御常教の信因称報をモデル表示すると次の様になる。



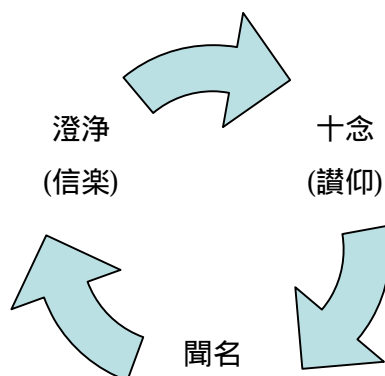
信心獲得が先であり、念仏は信心獲得後の報恩感謝の念仏としてしか許されてこなかったからである。信前の念仏を許すと自力に陥る懸念なしとしないとの見方による。信心から念仏への平面的な一方通行モデルである。

これにはご法義をお伝えしようとする上で重大な欠陥がある。

- ・ 信心が先であるとしてその信心は一体どのようにすれば獲得できるかについては明らかにされてこなかったからである。実はそのような命題の立て方自体を自力のはからいとしてきたのだった (Ref 山伏弁念の節談説教)。
 - ・ 念仏は、信心獲得後の信相続の為の易行とされるが、「為の」とする構造は示されてきたとは云えない。
 - ・ 本願招喚の勅命が信心獲得の為のエンジンとして捉えられることがない。なぜなら、本願招喚の勅命は、いつからかという命題を建てたとき、それが信心獲得の時であるという捉え方を捨て難いとしてきたからである (平成二十七年九月布教講会N勸学ご講義)。
- なぜこのような構造に留まったかという背景にはいくつかの要素があるが一つだけ挙げるとすれば、正依の大經第十八願文では、三心(信心)と十念が示され、三心が先だからというのが信前行後の大まじめな理由である。

実は、信前行後を時間的先後関係としたところが致命的な欠陥だった。

一方、聞名ループは次のように示される。



なぜこのようなモデルが提示されうるかについてその概略を以下ご説明する。

実は、正依の第十八願文には、何を至心に信樂するのかその対象が示されていないという課題があった。この課題は、異本の無量寿如来会では「我名」とあり、正依の成就文でも「聞其名

号」とあるから解決された。

隠されていた要素は「聞名」である。

そこで、改めて第十八願文を捉え直すと、

聞名 信心 十念の順序になるが、このままでは平面一方向モデルから脱却できない。

これを解消する鍵は、十念の意義の捉え直しにある。

ではどのように捉え直すのか。

実は、宗祖親鸞聖人は「南無阿弥陀佛をとなふるは仏をほめたてまつるになるとなり」（『尊号真像銘文』「第八条」、註釈版聖典 P655）と仰せ下さっていた。これが本質的な根拠である。

これに最近の文献学的な研究成果が援用される。

これには二つある。

一つには、「十念（サンスクリット語では、スムリ、語根は smr）」と同じ語根である『観音経』の「念彼観音力」の「念」について、偈前の三文に称名の意味を持つ原語が三つあるのに、偈文では、「スムリ」一種だけで表されていることから、「念」とは、実は「称」の意味で使われていたとする趣旨の藤田宏達の発見があったからである。

これは、インドでも釈尊ご在世の当初から念仏の「念」には、声に出す「称」の概念が日常次元で存在した旨の研究成果である。

乃至十念の十念が文献学的にも称名に等しいと確認された効果は実に甚大である。

即ち、親鸞聖人の「南無阿弥陀佛をとなふるは佛をほめたてまつるになるとなり」との仰せに照らして、第十八願から第十七願に繋ぐ道行きの前提が文献学的にも担保されたことになったからである。

今一つ、「十念」について梵本第十九願に訊ぬれば、「十たび心を起こす」の「起こす（pādaparivartaih）」とは「回転する」だった（Ref 大田先生ご指導による仏説無量寿経勉強会（広大会）平成二十九年四月度勉強会ご講義）。

これは「信相続」にも通じるとする平面一方向の意義よりは、筆者はより積極的に「聞名ループ」のループ概念を示唆しているかと窺うものである。

なぜなら、これによって初門位の信心から究竟位の信心へとアップサイクルする仕組みを担保する要素が一つ確認されたことになるからである。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会五月七日(日)十九時

伝統奉告法要団体参拝五月十四日(土)

仏教婦人会例会 五月十六日(火)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥